冬を迎えようとする土地にて

缶詰工場の隣に建っていた古い長屋がとり壊されたあとには、砕かれた瓦と狭い箱庭が残った。その箱庭に群島のようにして青草が生え始めたのが去年のことで、いまではすっかり緑の戦地だ。

もっとも緑が濃く草高のたかいのが庭の周縁部で、内側がつる性植物のサバンナ、中央部はまだ地肌ののこる未開地である。その中央部は長屋の土台が据えられていた場所で、廃材のとり払われたあとにもかたく締まった地面が植物をやすやすとは受け入れないでいる。一帯は住民たちの生活の重みによって窪められたのか、雨が降ると浅く広い一面の水たまりになる。

植物たちは無数の枯れ草を積み上げる。草の根はその遺骸をさらに踏み越えて、細い茎を湧きあがらせ、土をつくる反応であるかのようにじくじくと這い進んでいく。わずかに残った未開の土地が株立ちの植物の隙間に地味な色彩をそえている。

窪地の周縁では遺跡となった排水溝を隠すようにしてタデやススキが繁茂し、風がとおるとざわめくような音を鳴らす。それがいかにも植物じみたうら寂しい行進曲に聞こえている。

晩秋の朝、ねこじゃらしの領地には陽の光が届いている。アワダチソウの黄色が引き立ち画板のような枯れ草は土色に変わっている。沿道を自動車が途切れなく通りすぎ、塀越しの倉庫からは台車を押す錆び割れた音が響いている。

喧騒と静寂の入り混じった世界のうえを、黒地に金茶色の斑点のハネを泳がせて二匹のタテハチョウが飛んでいた。これで生き物かと感心する質量のない身体を泳がせる様子は踊りのようで、彼らの挨拶なのだろう。見覚えのないそれでいて妖しく惹かれるハネを見つけて二匹は互いに近づこうとする。右を回り左に進み、それでふさわしい距離をみつけてやろうとめまぐるしく反応し

ている。

やがて二匹は地面に降りて糸のような足で歩き、ひと季節の譜面でなおも交歓の舞を続ける。ゆっくりとハネを伸ばしては閉じるという動作は互いの呼吸をはかるような羽ばたきで、次第に緩やかになりついに止まる瞬間にまた脈打つように動かされる。

二匹のタテハチョウはおなじ時間を生きようとする。蝶の世界はかつてより細くはりつめた意識の中で繰り広げられたのだろう。彼らの衝動は安らぎや情熱のなかで、ついにこの寒日にまでたどり着いている。時折吹くそよかぜにあおられながら、近づいたり離れたりをしているが、命の摩擦は蝶の短い命を苦しめる。

陽が少しずつ昇り、箱庭全域もまぶしさを増した。二匹の蝶は自身の心を探っていたのか、それとも相手の心を探っていたのか、お互いにしかわからない拍子に一匹がどこかへ飛び去ってしまった。

すずめとセキレイが餌を探しにやってきたが、人の気配に気づくとすぐに飛び去った。塀際にあらわれた斑猫は気乗りしない様子でなにかを追いかけ始め、工場の裏にゆっくりともぐり込んでいった。シジミチョウはアワダチソウの花にご執心である。空は青さを濃くした。

始めは感情を昂ぶらせた子供のしゃら声が細切れに届いてくる。何かが起こっていると耳を澄ませると、庭全体が聞き耳を立てているように動きを止めてしまう。音を聞くことに集中すると、読経する声に似た低いざわめきが確かに聞こえてくる。大勢の人間がこちらに向かってくるのだとわかるといくらか動揺が静まって、また草花の揺れているのが見えてくる。そうして落ち着いた生き物の群れに心を合わせていると、いつのまにか祭囃子がそれとわかるほどに響いている。声を張り上げて、力を発散して進む一群が、もう間近まで来ている。

建物の隙間から見える通りにはまだ影も映っていないが、その一ヶ所は別の世界をのぞくことができる窓のように明るく、まさに今から動物の活発なエッセンスが注がれてくるようだ。

待ち構えていた限度を超えて大きくなる囃子に、草も蝶も支配されて、光も影も見えなくなってしまう。

洪水が唐突に達して、人々が影絵のように過ぎてゆく。両手をひらひらと踊らせてそれぞれの癖で歩き、感情を発散させながら歩いていく。人の感動という感動が、すべて形を持って流れていくような老若男女の一瞬である。

箱庭は息を止めたように動かなくなった。人間の記憶が流れ始めると、さまざまな想像が弱さのためにひれ伏して、いっそあの流れに踊りこもうかと感じ始める。気圧の差で吸い込まれるのと同じで、親和で結ばれたものどもは何もかも反発し、ばらばらになって一点に流れ込もうとする。

しかし、本当には何も動かない。草の一本も振り返らず、石のひとつも浮き上がらない。歓声は峠を過ぎて、人々は去っていく。何事も感じさせずに、草花の間をシジミチョウが飛んでいる。

青い空を隔てるようにして、朱の光を受けた雲が流れている。箱庭は最も色づく時間を迎えた。黄も緑も色濃く揺れている。「ギ、ギ」と鳴きながらコウモリが小虫を捕まえている。庭は魔力が沸いたように芳潤だ。命の薫るその一時も早く過ぎていく。

地鳴りのように遠く響く都会の騒音。街灯の光を浴び、チャコールグレイの中に老緑が震える。真夏の暮れのような、命に満ちた雰囲気はない。草の骸が長い冬を迎えている。地に落ちた種子が眠りについている。葉を落とした桜の木が背後から光を受けて「俺を見ろ」と枝を揺らしている。土の匂いを含んだ空気が部屋の中に入ってくる。

区切られた空からも無数の星を見ることができる。輝く恒星と影の惑星とで、この星の空は埋め尽くされているのだ。天空には想像もできない大きさをもった、爆発だけの世界がある。原始に昇った魂も未だにたどり着けない彼方にある。始原のことを考えると、星は銀河の飛沫のように見えてくる。

一匹の孤独なコオロギが鳴いている。人が後回しにした世界が深深と広がっている。星星は荘厳で、何時であっても光は充溢している。

幸せな幻が立ち昇り、長屋の住人たちの悲喜の思い出を鎮めようとするかのように、静かな時間だけが流れている。生滅の世界は甘美な幻想だ。